A. Vesalii の解剖書の図について

酒井　恒

Andreae Vesalii の解剖書の図は引用されることが多いが、本書はラテン語で書かれているので、これを通読した学者は、我が国では少ないと思う。筆者は、諸般の事情により Ontleedkundige Tafelen の研究を中断してから、Andreae Vesalii 著の解剖学書を通読することを志したが、本書は筆者には難解であり、しばしば本書を読むことを中断した。

一九八七年、Alexander von Humbold-Stiftung の研究奨学生として渡独した際に、Muhs 博士から贈られた一冊の本が契機となり、A. Vesalii の解剖書を読むことにした。

本書の扉図には "Andreae Vesalii BRVXELLENSIS, SCHOLAE medicorum Patauinae professoris, de Humani corporis fabrica Libri septem", と記され、序文によれば、一五四二年に出版されている。筆者はその複刻版（一九六四）を読むことにした。

本書は七分冊を合本したものであり、その書き方は各分冊ごとに少し異なり、第一分冊(1—168)には主部（Caput）1—60と図、第二分冊（169—256）には表（Tabulae）1—16、主部1—62、第三分冊（257—313）には一五図、八枚の小図、主部 1—15、第四分冊（315—354）には一〇図、主部 1—17、第五分冊（355—558）には三五図（Figur）、主部 1—19、第六分冊（559—604）には一三図、主部 1—15、第七分冊（605—661）には一八図と三図（含小図）、主部 1—19である。その大きさは前文 Ad divum carolum…六ページ、Ioanni oporino graecarum Lite…二ページ、本文六六二ページ、索引三六ページからなり、一九六四年にベルギーで複刻出版されている。本書は大部の書であるので、まず、本書の中の図を紹介することにした。

図の略号は図の中にも書き込まれ、図の線と混じて、捜すのがはなはだ困難なものもある（とくに小字は著しい）。図の説明には引き出し線を用いる方がよい。説明は図の近くにあるが、一つの図の説明が数ページに及ぶものがある。

観察はかなり詳しい。頭蓋骨、その他に見られるように、変異のあるものを幾つか並べて比較している。耳小骨は三個である。この点では J.A. Kulmus 著 "Ontleedkundige Tafelen" の記載とは異なり、筆者がすでに指摘したごとく、Kulmus の場合は小児を解剖したと思われる。槌骨と第七脳神経との関係（脳神経は第九対まで）を示しており、かつ、その解剖がかなり困難であったことが察せられる。

以下、図の順序に従って説明する。

（名古屋大学医学部解剖学第一講座）

佐賀藩の輸入医学書

酒井シヅ

佐賀には、幕末、蘭方医学がいかなる動機で、どのような形で取り入れられ、定着していったかをよく示す資料が残っている。それらはすでに『鍋島直正公伝』をはじめ、いくつかの成書で触れられている。著者もまた佐賀藩の蘭方医の動静、蘭学塾の成立ならびに医師登録の実態について報告してきた。今回は佐賀藩が購入した医学関係の蘭書について、それがどのような性格のものであったかを述べるが、それに先だって佐賀藩の蘭方導入過程の概略を以下に示した。

佐賀藩において藩の医学寮が建てられたのは、天保五年（一八三四）七月十六日であるが、そのきっかけになったのは、文化六年（一八〇九）に古賀穀堂が提示した「学政管見」と題する学術奨励の意見書である。そのなかで医師が自宅でめいめい勉強していても効果のほどはおもわしく